

「知事とのフレッシュトーク」（平成２１年１２月９日実施）の概要について

「知事とのフレッシュトーク」は、知事が高校生等の皆さんと県の未来について意見交換を行うものです。

平成２１年１２月９日（水）に弘前市の青森県立弘前高等学校において実施した、「知事とのフレッシュトーク」の概要をお知らせします。

学校の概要

明治１７年に青森県中学校として東津軽郡青森新町に創設。その後、明治２２年に弘前に移転。これまで、弘中・弘高合わせて約３万名の卒業生を輩出し、多くの多彩な人物が各界で活躍している。

現在、１年生２８２名、２年生２８２名、３年生２７４名の８３８名の生徒が学んでいる。

知事（始めのあいさつ）



おはようございます。

今日は、この会場へ入ってきて、とてもドキドキ、ワクワクしています。なぜかという、私も皆さんと同じような時代があって、皆さんの年齢の時はとても素晴らしかったな、そんなことを思うからです。

だから、今日は、私自身が皆さんと同じ高校生だった時と同じような気持ちで、この会場に来ました。そして、本当に皆さんがキラキラして、未来が輝い

ているということ、改めて思いました。

皆さんには、若いエネルギーで、ふるさとのことを大事にして、ふるさとのことを思っ
てほしいと思います。また、世界の中で、日本の中で、何かをしてみようという、夢を持
ってくれたらうれしいと思います。

今日は、何よりも私自身が楽しみで来ました。皆さんの意見をしっかり聴いて、皆さん
からエネルギー、若さをもらいたいと思います。

また、今日はお互いに素晴らしい時間を過ごしたいと思いますので、よろしくお願いします。

発言者１（１年 女子）

私が疑問を持ったのは、青森県の自殺率の高さについてです。全国でワースト２位とい
うことで、いろいろ調べてみました。調べたところ、特に中年男性の自殺率が以前に比べ

て上昇していることや、自殺の理由としては、他県よりも経済問題に関する要因が多いということがわかり、自分の住む県がそんな深刻な状態になっていることに驚きを感じました。

そこで、この問題について、青森県では十分な対策を行っているのでしょうか。自殺率が年々増えているにもかかわらず、数年前よりも予算が減少しているし、もっと比重を置くべきではないかと思います。苦しんでいる人の心のケアを大切にしてほしいです。今でも、相談窓口や心の電話などがあることは分かっていますが、機能しなければ意味がないと思うので、広報活動とか報道機関とも協力して、もっとたくさんの人に知ってもらえればいいと思います。

それから、経済的な問題が背景にあるので、多重債務の救済など、県規模でしかできないようなこともたくさんあると思うので、青森県でこれ以上、悲しい理由の自殺が増えないように対策にもっと力を入れてほしいです。よろしくお願いします。

知事

この問題について指摘してくれたことをうれしく思います。

皆さんに聴いてほしいのですが、絶対生きるという気持ちが大切だということです。生きていればおもしろいことがある、何とかなるとということです。今日、皆さんを前にして、本当に未来が輝いていると話しましたが、輝いていればいるほど、いろんなことで悩んだりして、この世に自分が存在したくないと思うことがあるかも知れません。知事として、いろんな場所で話をしていますが、周りに助けてくれる人、一緒に考えてくれる人、そのような人が絶対にいます。今まで生きていた人が、自分の目の前から、急にいなくなることは一番辛いことだと思います。

発言者は、物事をよく見て分析してくれたと思います。私は、百石町長時代に一人一人の命を守るために、保健医療福祉包括ケアシステム、具体的には、保健、医療、福祉の方面から一体となって支えるサービスで、一人一人を守っていくためのメニューを作って、病院、福祉施設、あるいは、保健師の力を活用しながら、一人一人の命を守るということを進めてきました。その場面において、保健師がそれぞれの家庭を回り、早めに様々な問題に気がついて対策を行ってきたという思いがあります。

そして、私が、知事に就任したのは平成15年で随分前になりますが、そのころの本県の自殺者が年に約570人という大きな数字でショックを受けました。包括ケアシステムを含め、様々な対策を行い、数字としては約100人減りました。それでも多くの人が命を自分で絶つということは、県知事としてとても辛いことです。

現在、県では、まず、市町村が最も住民と接していることから、自殺が多い市町村などに対して、現状の分析をしたり、自殺防止対策の計画の実施を積極的に進めるための助言を行ったり、保健所での啓発事業の強化などを行う、自殺対策普及啓発事業を行っています。

また、自殺対策のための地域力支援のための事業を行っています。皆さんは、まだ高校生なので、ご両親などが身の回りで一番支えてくれていると思いますが、一定の年代になると肉親がいなかったりします。その場合、地域の方々に支えてもらうことがとても大事

になってきます。声をかけてくれるボランティアの方々、あるいは、民生委員、児童委員、介護の専門の委員の方々、医師会、医療団体、福祉団体の方々、みんなでネットワークを作って、自殺を防ぐための対策、重要なのは声をかけるということだと思いますが、そのような対策を進めることとしています。

更に、自殺対策緊急強化という事業で、テレビを見ていると時々出てくると思いますが「生きてほしい」というメッセージをテレビやラジオで流したり、「自殺してはいけない、死んではいけない」という演劇を県下全域で行ったりなど、どちらかといえば精神面になりますが自殺対策を行っています。

そして、青森県の場合、最大の課題は雇用の場の確保です。子育て支援を行っている保健師や、福祉関係、児童関係の仕事をしている方々から「知事、どんな対策よりも働く場をつくってほしい。自殺対策も子供支援も全部つながっている。青森県の場合、働く場をどのように増やしていくかである。」と言われます。ですから、知事就任以来、仕事づくりのため、155社の企業を誘致、増設してきました。今年だけに限ってみても、働く場を確保するために緊急雇用対策を実施し、4,400人分の雇用創出を目指しています。

また、経済悪化に伴い高校生の就職環境も劇的に悪化していますので、高校生枠を増やすために、県として雇用を支える対策などを提案していくこととしています。

この会場にいる皆さんの中から、自分で会社を興し大勢の人を雇う人、何か発明してくれる人など、チャレンジしてくれる人が出てくることを期待しています。

そして、地味なのですが、他の地域や企業から注目されている事業に、ほほえみプロデュースという事業があります。「全国にないことですが、青森県のみんなが笑えること、ほほえむ気持ちをまず持つことから始めたいと思います。青森県にとって大事なことは、まずほほえんでから何かを考えようということが大切だと思います」ということで提案された事業です。

この事業は、相手のところに寄り添い、ほほえみを引き出せる人材を養成していくことを目的として講習会を行う事業で、この講習会を受講した人を「ほほえみプロデューサー」というのですが、これまで約2万3千名の方が「ほほえみプロデューサー」となっています。これからも「ほほえみプロデューサー」を増やして、みんなが笑ってくれる青森県になればいいと思っています。

ここで、その講習会を受講し「ほほえみプロデューサー」資格を持っており、皆さんの先輩でもある中南地域県民局地域支援室長に話をしてもらいます。

中南地域県民局地域支援室長

私がほほえみプロデューサーの講習を受けたとき、4つのポイントがあったと理解しています。

1つ目は、相手と話すときは同じ目線で話をしようということです。そうすることによって、私はあなたのことが好きなんだ、あなたのことを理解したいんだということが伝わります。

2つ目は、相手をたしなめる場合は、褒めて、たしなめて、褒めるということです。

3つ目は、まず自分を好きになることです。自分を好きになると、相手のことも好きに

なっていくということです。

最後は、「ありがとう」の言葉です。どんなときでも「ありがとう」と言っていると、自分も気持ち良くなるし、言われた相手も気持ち良くなる。だから、「ありがとう」の言葉を一杯使いましょう。これが私のほほえみプロデュースです。

知事

このほほえみプロデュースの事業は、高校生も参加できますので、興味を持ったら県民局などに連絡してください。

自殺対策については、様々なソフト事業を組み合わせながら、あるいは、いろんなPR事業も含めて進めていきます。自殺者数については、100人減ったのだから半分にしたいし、半分に減ったらゼロにしたいということで努力していきたいと思います。これからも働く場を作りながら、しっかり取り組んでいきたいと思います。

発言者2（1年 男子）

私の提案は、卓球の大会を県内で開催することです。青森県は過去に世界チャンピオンを輩出してきた県で、何よりも競技人口が多く、卓球が非常に盛んな県です。

また、開催できる施設が十分にあることもその理由です。弘前市の県立武道館、青森市の青い森アリーナ、屋内スケート場は卓球台を数多く設置することができ、大規模な大会でも不自由しないと思います。

私自身、卓球をやっている者として感じるのですが、卓球は男女、年齢を問わずに楽しめるスポーツだと思います。大きな大会を開催し、青森県の良さを世界中から集まる人々に体験してもらい、そのことを通して、県民が郷土に対する愛着を深めて、定住する人が多くなってくれればいいと思います。

知事



卓球王国の青森県ということで、秘書課長が元卓球部の部長だったりして、県庁内でも卓球が盛んです。

平成23年度に北東北で全国高等学校総合体育大会が開催されますが、この大会も含め様々な大会を誘致したいと思って努力してきたところです。卓球も含め、様々な大会等の誘致をしているところですが、なかなか決まらないということがあります。

そのことについて言えば、来年の12月に新幹線が全線開業し、鉄道アクセスがとても良くなりますので、それに向けて、いろんな大会を引っ張ってくることできるように取組を進めています。

また、青森県では、健康づくりが課題になっていて、卓球は誰でも参加できるし、一定の年代になったらラージボールでの競技もあり、60歳を超えても参加できる競技であることから、この課題に対しても有効な手段です。

更に、コンベンションの誘致ということでは、今年は、青森市で50件で約1万6,400人、弘前市で30件で約8,900人を誘致しています。大きな卓球大会だと、全国からいろんな人が来てくれると思います。努力していきたいと思っています。

発言者3（1年 女子）

私が、気になった資料は、県のホームページにおいて、「青森県の行財政改革の次なるステージに向けて」に掲載されている人件費の推移です。

私は、人件費が一番高いのは東京都で、青森県は低いと思っていました。でも、人件費のグラフを見たら、比較されていた岩手県、秋田県が、青森県より低くなっており、青森県の方が低いと思っていたので驚きでした。東京都は、人が多かったり経済が発展しているので、人件費が高くなるのではないかと考えますが、岩手県、秋田県は規模もほぼ同じですし、青森県と同程度の人件費になるのではないかという気がします。

そこで質問ですが、県によって人件費はどのように決められているのですか。

知事

県の資料をきちんと見てくれてありがとうございます。ただ、標準財政規模に対しての比率を比較したグラフということで、専門的な部分もあり分かりづらい資料だったと思います。

実は、ここにいらっしゃる先生方も含め、5年間の約束で給与をカットさせていただき、徹底的に財政再建を行っており、きちんとカット分はお戻しさせていただきましたが、青森県の給与水準自体は決して高くありません。

「ラスパイレス」という、国家公務員の給与を100とした、給与水準を比較する際によく用いられる指数で比較すると、平成20年の青森県は、東北6県の中で下から2番目です。低い順に行くと、秋田、青森、福島、岩手、山形、宮城という順です。

次に、人件費、給与の決め方ですが、人事委員会という組織があって、その人事委員会で、県内の企業の給与の実態を調査した上で、給与はこうするべきという勧告があり、県議会での審議を受けて決めています。だから、発言者が思っているほど高いという状況ではないと思います。

また、人件費全体でも、一番のピークだった平成11年の約2,300億円が、今では、約2,000億円まで実際に下がっています。これまで、行財政改革など、いろいろなことに努力してきたという思いがあります。

そこで、県の財政について話をしますが、私が知事に就任した時には、青森県は非常に大変な状況でした。当時も今も借金は1兆3,000億円あるのですが、当時は、いわゆる箱モノなど、いろんな事業をやっていたために、将来的に増えていく借金、その借金が金利でブクブクになっていて、さすがの明るい私も真っ暗になりました。県として、行財政改革を抜本的に徹底してやらないと、2年以内に給与が払えなくなる、もたせても3年というような状況でした。そのため、給与カットや大胆な事業の見直しなどを行い、平成20年度において、プライマリーバランス黒字化、借金の利払いをして、かつ借金の元金を返済できる状況になりました。8億円の黒字化ですが、130年の県政史上で初めてプ

ライマリーバランス黒字化を達成することができました。

このように、青森県をつぶさないために様々努力してきました。その中で人件費についてもカットなどしながらやってきているということです。

発言者 4（2 年 女子）

私は青森県出身ではなく、仙台で生まれました。仙台と青森では、人口の違いなどのほかに、さまざまなところで違いを感じます。その中でも、今、青森県にはなく仙台にあると思うことについて話します。それは、いろいろな分野における情報量が少ないなと感じます。映画や舞台、演劇、コンサートにしても、青森県内で上映、開催されることは、ごくまれに感じます。地方都市だからこそ、芸術や文化の面での活性化を期待しています。

平成19年4月に開館した十和田市現代美術館ですが、平成20年11月末の段階の1年7カ月間での来客数が、十和田市の人口約6万6千人の約5倍である約33万人の来客数ときいています。

実際行ってみて、今までの青森にはないものであるということを感じました。郷土文化の展示ではなく、現代美術という分野で、県外からも青森県を訪れる人がいるということに喜びを感じました。これから青森県の郷土文化を生かした芸術施設だけではなく、新しさを感じることができる施設がもっと増えてほしいと思っています。

知事

意見ありがとうございます。人口が集積しているところで箱モノを用意して、箱モノから表現したものがアートであり、文化であり、芸術であると思っているとしたら、一言言いたいと思います。

毎日見ている岩木山、すごく情報発信力があって、アートじゃないかな。季節ごとに違う、時間帯ごとに違う、自然力とか人間力とか、そういうのもアートだと思います。コンサートでも、実は箱モノに行き行って聞くことはなくて、自分の魂が実際はどういうところで感動するのかというのが芸術や文化だと私は思っています。

だから、知事に就任したときに引継いだ県立美術館についても、予算を切り詰め、規模も半分でいいと思っていました。だからこそ、ただ絵を置かないでくれということで、アレコホールで音楽もやってほしいし、ダンスもやってほしいし、いわゆる既存の概念にとらわれたことをやるなと指示したことを今、改めて思い出しています。

青森は、至るところに芸術、文化があって、私は、寒くなってきた時に津軽三味線が聞こえてくると「ゾクゾク」とします。人それぞれに感じ方はあると思いますが、その土地の持っているすごい力、エネルギーというのかな、青森県は芸術のエネルギー、文化のエネルギーを、荒々しいかもしれないけれど持っていると思います。

私たちは、それを感じ取るとか、それを理解し、表現していくとか、そういうことが大事だと思っています。いろんな情報発信をするに当たっては、箱モノスタイルではなくて、青森の持っている内実の力を発信していくということを大事にしています。

確かに、チケット等を買って見に行く物などの刺激が少ないかも知れませんが、ただ、自分の暮らしている、周りにある驚きというものの、その一つ一つが青森県の場合は芸術につ

ながっていく、そういうことを感じてくれたらうれしいと思っています。

青森県の場合、いろんなところに縄文の遺跡群があって、少し掘ったらいろんなものが出てくるということは、フィールドそのものが芸術、文化の場だと感じてほしいと思っています。リンゴ畑を歩いてもらって、リンゴの木の素晴らしい手入れや、リンゴの並木、畑から、四季折々の文化面の高さなどを感じてほしいと思っています。

これから県知事として、美術館などを使って、どんどん情報を発信していきたいと思いますが、青森県が持っているそもそもの力というものを、どんどん理解してもらえるような青森県にしていきたいと思っていますがいかがでしょうか。

発言者 4（2 年 女子）

やはり、青森にいと、いゝんな職業に触れる機会も少なくて、高校生の私からすると、いゝんなものに触れ合うことが必要だと思ひます。

知事

高校生向けではないかもしれないけれども、県では、県内の 100 の仕事を紹介する DVD「はたらく心」を作成していました。例えば、放送のプロなど各分野の 100 の仕事、100 の生き方というのが収録されています。また、「あおもりのものづくり再発見」という DVD で 30 の特殊技術、例えば、弘前で持っている技術で言えば、世界で大きなシェアを誇る時計の文字盤技術とそれを生み出した人間の生き方とかが収録されています。私はそういうことも産業、生業なりわいかもしれないけれども、芸術、文化だと思っていますが、そのような DVD もあります。

美術館、博物館に行って、あるいはコンサートホールに行って体験することも大事ですが、今の時代だから、DVD というものもあります。ぜひ、発言者には、この青森を良くしよう、この地に足を着けて自分は生きていこうという、プライドを持って頑張ってくれている 130 の例を見てほしいと思います。後日、発言者あて送付しますので、クラスメート等と見てくれたらうれしいです。

将来、政治経済研究者を目指すということも聞いていますので、経済研究者になるときに、地場の経済、地場の生業なりわいがどれほど大切なことなのかについて、感じるができる政治経済研究者になってくれたらうれしいと思います。

私も、青森県の人たちに、箱モノの中で見えるコンサートや世界的な美術展など、文化、芸術も楽しめるようにするよう努力しますので、できれば、青森が持っている自然の力、人間の力等の芸術性を「グッ」と感じてくれたらうれしいと思います。

発言者 5（2 年 女子）

よろしくお願いします。私は将来、無農薬農業の研究家になりたいと思っています。

私は、若者が農業をしやすい環境をつくるべきだと思います。雇用状況が厳しい現状ですが、そのような状況でも、農家では重労働を強いられている年配の方々が多く、若者の助けを必要としていると思います。そして、青森県は、リンゴなど農業が盛んなので、この機会に青森県をアピールするチャンスだと思います。

しかし、農業は収入が安定しないことが、若者が農業を選ばない一つの理由となっていると思います。そこで、若者が農業をするに当たって、何らかの支援をしていただきたいと思います。具体的な策として私が考えたのは、農業従事者を市町村で雇って、公務員として使用するということです。先ほど話が合ったように、公務員も給料を減らしたり厳しい状況だとは思いますが、収入を安定させることで、農業が発展する一つきっかけになってくればよいと思います。

それから、農業は化学肥料などを用いることが多く、危険も伴います。無農薬農業に切り換えたいと思っても、様々お金もかかり、そうできない農家も多いと思うので、無農薬農業を始めたい農家に対して、何らかの支援を行うなどの状況をつくっていただければよいと思います。

知事

発言者の話は、物事をとても真っすぐに見ていて、自分もアイデアを出して解決したいという気持ちが伝わってきて、うれしいと思います。

私たち青森県にとっても、これからの農林水産業、第一次産業の後継者の問題は、とても大きい問題です。第一次産業、今回は農業ですが、農業に従事していて生活できる、儲かるようにしていかなければならないと思っています。

県では、「攻めの農林水産業」を進め、作っても売れなければ収入にならないことから、徹底して出口の取組をしています。人は、食べないと生きていけません。日本の食料の自給率はカロリーベースで約40%と低い状況ですが、青森県の場合は、とても恵まれていることに、米は当然足りていて、果樹では自給率が約570%、魚や野菜は200%から300%など、自給率全体では約120%ととてもたくさんの食料を作っています。だからこそ、作ったものを、よい単価でよい形で販売していく出口戦略が重要です。

そして県では、農業にとって大事な基礎である、水、土、人、それぞれについての取組を進めています。



まず、水ですが、青森県の場合は、とても潤沢で質のよい水があります。これを将来も維持するため、山のでこ入れをして、質のいいブナの樹林地帯から出る栄養分を含んだ水が、1万1,000キロメートルの水路のネットワークで十分に行きわたるように1つ1つ見つめ直してきちんと整えています。

また、土ですが、青森県の場合は、冷涼な気候でそもそも農薬の使用量が少なく、なめても甘いよい土壌ですが、土壌バランス等が悪化している所もあることから、日本一健康な土を作ろうという運動をしています。例えば、土壌の診断をして、窒素が多い、リン酸が足りない、酸性土壌になっているなどの現状を把握し、それに対応する対策を行い、健康な土に戻そうということを徹底して行っています。

そして、人についてですが、「大きく育て！青春・農起業トップランナー育成事業」という、若い人たちに農業をやっていく上で理解しなければいけないことへの支援事業を行

っています。具体的には、毎年20人ぐらいの若い人たちに、農産物を作ることのみではなく、財務とマーケティング、要するに資金繰りと売り方についての研修や、売り込みの実践など、農業トップランナー育成のため様々な活動に支援を行っています。

そして、これまでの「隣が機械を買ったから、うちも買う」というような農業ではなく、地域ぐるみで農地や農業機械などを共同利用し、効率的な農業生産を行う「集落営農」を組織し、引っ張ってくれることを期待しているところです。

もう一つ、農薬についてですが、青森県の特徴は、夏季冷涼な気候であることから、他県に比べても圧倒的に農薬の使用量が少なく、土壌改良によって更に農薬使用量を減らすことができます。ただ、無農薬は、現実的に非常に難しい部分があって、必要な農薬を少しだけ使う農業、これを青森県の場合は進めています。また、限りなく有機、無農薬に近い農業に取り組んでいる人たちがたくさんいますので、そういう人たちをこれから後押ししていこうと思っています。

発言した方は、今は受験勉強しなければいけませんが、大学に入ったら、青森県の農業のプロたちの生きざまや農業の仕方、集落営農というグループをどのように組織し、後継者を育成しているかについて、論文にするなどしてしてくれたらうれしいと思います。

そのためにも県として、山から海まで水が下りてくる間にどのように山の栄養を土にも海にも出すかという水路のネットワークや、土づくりについて支援し続けていきたいと思っていました。

そして、将来、勉強して農業の研究家になったら、今この時期に育成した農業トップランナーたちが、どのように元気な農業、あるいは、地域集落を元気にするために働いているかなど研究してくれたらうれしいと思います。また、いろんなことを幅広く覚えて、生産のことだけ、出口の経済学だけの研究者でなく、トータルとして農業が生命産業としてどのように回っているのかなどを論文発表してくれたらうれしいです。

発言者6（2年 女子）

私は将来、医師として医療に貢献したいと思っています。

青森県では、へき地の医師数の不足や研修医の県外の流出などによる医師不足が問題になっています。このことについて、インターネットで調べたところ、県では、弘大の医学部の定員増加や、大都市からの応援チームづくり、それから、世界一大きいクリーブランドクリニックへの研修に対する取組など、着実に対策を行っていることがわかりました。

今回、私が注目したのは、公立病院の医師数の減少に対して、県ではどのような対策を行っているのかについてです。特に、女性医師が増加していることから、女性の中には、子育てと仕事を両立させる方もいるので、女性医師に対しての子育て支援はどのように行われているかを知りたいと思っています。

私としては、例えば、院内保育所を24時間体制にしたりとか、女性医師復帰を目指す病院への補助金を出すといった取組を行うことが医師不足の解消につながるのではないかと考えています。

知事

医師という仕事は、人の命と真っ正面から向き合い、夜勤もあって病院に泊り込んで仕事をしたりとか、とてもきつい仕事です。

でも、人の命と向かい合って、命を守れるとても素晴らしい、尊い仕事だと思います。そして、多くの方々から感謝される仕事です。

私は、知事になる前は百石町長でした。その時から、青森県は医師不足で、弘前大学の医学部は協力してくれるのですが、県外出身者が多くて、医師になっても県外の実家に帰る人などが多く、毎年100名近い医師が育っても残らないという傾向にありました。

百石町にも町立病院がありましたので、医師がいなく苦しい状況でしたが、勉強好きの医師のために研修制度を作ったり、保健・医療・福祉の一体となったサービス、これを包括ケアというのですが、包括ケアと一緒にやりませんかという体制を作って、医師を確保しましたが、県内を見渡すと医師不足で、公立病院に勤めている医師は、燃え尽き症候群や働き過ぎで自分が体を壊すといった状況でした。

そこで、知事になってすぐに取りかかったのが、県の財政問題と「良医をはぐくむブランドデザイン」といって、青森県で医師として生涯ここで働けてよかった、ここでいろんなことを学べてよかったという環境を作る仕組みづくりでした。

今、お話ししてくれた、アメリカのクリーブランドクリニックとの提携もそうだし、修学資金も倍以上にして充実を図りました。

また、弘前大学と連携したり、奨学金制度を大きく増やすなどの対策を行い、青森県内の医学部医学科合格者が40名弱ぐらいから、去年は80名を超えて倍以上に増えました。

そして、女性医師についてですが、女性の場合、結婚、出産、子育てをすることでリタイアすることが多いです。私の同級生でも、あとで復職しましたが、子供が大きくなるまでということで休職した人がいました。

このように3年とか5年休んだ後に、医師としてまた活躍してもらうため、医師として復帰できる研修の仕組みというのも今、作っていました。

それから、24時間の保育体制ということですが、各病院、それぞれの公立病院でそれなりに工夫してもらっています。また、ワークシェアといって、午前中だけ勤務とか、午後だけ勤務とか、最近は夜だけ勤務したいという医師もいますが、希望に合わせた形で勤務するという仕組みも作っていました。

このように、日本の中でも青森県は医師が足りなくて、町長時代からそのことを感じていたからこそ、県知事になって、医師を青森県で育てていく仕組みづくりを進めていました。

発言者には、ぜひ医学部医学科に合格していただいて、青森県にできれば残っていただければと思います。

発言者6（2年 女子）

はい。

知事

ありがとうございます。発言者が結婚してお産したときに支援できる体制を各公立病院とも連携しながら進めていきます。

でも、人生だから、好きな道に進んでもいいからね。

知事所感

皆さんが、青森県のこと、ふるさとのことに興味を持ってくれて、こういうことが心配だ、こうしてほしいという気持ちを持っていてくれること、そして、その基本にあるのは、弘前、青森県が好きで生まれて育ったところだから自分たちも大事にしようという気持ちであって「知事、しっかり頑張れよ」という激励をいただいたと思っています。

また、何よりもみずみずしい感覚で、こういうことがあると問題点を話してくれたことをうれしく思っています。

そして、皆さんには、とても多くの時間があり、若さは力だと思います。徹底して学び、体を鍛えることが本当に大事だと思いますし、そういうことを皆さんにはお願いしたいと思っています。

もう一つ、人間の持つ好奇心についてですが、最初にナマコ食べた人ってすごいと思いませんか。ウニもそうだけど。この好奇心は、とても大事なことで、人類、我々を進歩させ、前へ前へと進めてきたものです。若いのだから、知らないことがたくさんあると思います。あれを知ってみたい、これを知ってみたい、チャレンジしてみたいという好奇心、チャレンジ精神を持ち、持ち続けてくれたらうれしいと思いました。

これから、皆さんの未来には、数々の苦難があるかもしれませんが、楽しいこともたくさんあります。しっかりと一歩一歩着実なことをやりながら、一歩一歩人生を歩んでください。今日はありがとうございました。